



お元気ですか。コロナ3年目、非常事態が続いてますね。体力をつけて乗り切りましょう。



折々ことば 鷺田清一 2252

磨くという事は、何かと何かを擦り合わせる事。擦り合わせないと磨かれない。物以外の物と何度もこすれ合うことでかびかしてくる。人も同じ。自分とは異質な人、理解しにくい人、話がうまく通じない人との摩擦をくり返し体験する中で人として艶やかになってゆくと、仙台を拠点に長く子どもたちのためのアート・ワークショップを展開してきたハート&アート空間ピエアイの代表は語る。そんな遭遇を希むなら自分のほうから出かけていかなくちやと。

2022・1・4

関口怜子

東京・秋葉原の無差別殺傷事件(08年)と「黒子のバスケ」脅迫事件(12、13年)を例にすると、検証報道や裁判の記録から加害者2人の成育環境が見えてくる。秋葉原事件の加害者Kは、進学校での成績低下で人生が終わったと思ひ、派遣労働者として孤立を深め、ネットにも居場所を失った。ほぼ同じ経緯を辿った、人気漫画を標的とする脅迫事件の加害者Wも、自らを人間関係や社会的地位などの失うものがない「無敵の人」だと陳述し、Kを擁護した。人を殺せないのは、殺してはいけない理由があるからではない。殺せないように育つからだ。そうした感情面の発達は、どんな人間関係の中で育ったかで決まる。その成育環境が1960年代から90年代にかけて激変した。子どもはそれまで①異年齢集団による外遊びで共通感覚を養い、見ず知らずでも互いを仲間になりうると感じる対人能力を培った②親や教員が与えた思い込みが、親戚のおじさんや近所のおばさんの「ナナメからの介入」で緩和された③教室には団地・農家・商店・ヤクザなどの子が集い、互いの家を行き来していろんな生き方を学べた④家族の外でも全人格的に扱われ、SNSのいいね!の数で代替できない尊厳(自己価値)を持てた。

## 「生き方、一つじゃない」子どもに伝えて

相次ぐ無差別の襲撃事件 社会学者・宮台真司さんに聞く



朝日新聞 2022.1.27(金) 「誰でもいい」孤独な自分 社会全体に向く怨念

ところが、60年代の団地化で地域が、80年代のコンビニ化で家族が、90年代のケータイ化で関係全般が、空洞化した。土地に縁のない「新住民」の不安から遊具撤去や校庭ロックアウトが進んで外遊びが消え、地域が不信ベースになって親以外の大人との交流が消えた。親と教員とネットと友人との希薄な関係だけが残った。

子は、親の自己実現のダシにされ、進学校に入れと尻を叩かれるが、かつてと違ってその価値観の外が分からない。地元の公立で優等生だった子も進学校に入れば、多くは教室で「ただの人」。自分を価値のない存在だと感じる。それで終わりではない。疑似共同体であるのをやめた会社でも、希薄な関係の中で置き換え可能な存在で、競争に負ければ「ただの人」。

だが、人の感情はこうした過剰流動性に耐えられない。「死刑にしたい」「誰でもよかった」と本人が語る無差別な加害行為の背後に、加害者自身が置き換え可能な「誰でもいい」存在として扱われてきたことによる怨念がある。背景には、30年間続いてきた絶えずクビに脅える非正規雇用化や、絶えずハブられること(仲間外し)に脅えるSNS化もある。それをもたらしたグローバル競争とテクノロジー化は今後も確実に進み、「誰でもいい人」が量産される。

### 横道にそれていい

米国を筆頭に海外でも学校や宗教施設での銃乱射が目立つ。加害者の背景にあるのは、「昔より劣る」「周りに比べて劣る」という「相対的剝奪感」と、「悪いのはこいつらだ」という「外部帰属化」の構図だと、社会学は見る。

米国の多様性は「ゾーニング」がメイン。マジョリティーの白人男性が自分とは違うゾーンにいる移民や貧困層に外部帰属化の感情を抱きやすい。日本でも在日差別や生活保護受給者へのバッシングが目立つが、欧米ほどはゾーンが目に見えず、欧米のような「〇〇が悪い」という条件つき無差別殺人より、「社会全体が悪い」という単純無差別殺人が起きやすい。

毎日のように事件が起き子どもたちもその中に巻き込まれていきます。被害者となることも加害者となることもあります。切なくて目や耳をふさぎたくなります。今回の記事、何回も何回も読んでしっかり理解しました。大人として子どもたちに幸せは一杯あると伝えていきます。接する機会は少なくなりましたが…。  
文責 阿部陽子 スマイルサポート(017-722-3749)



みやだい・しんじ 1959年生まれ。東京都立大学教授。現代社会や戦後思想を広く評論。著書に『日本の難点』『社会という荒野を生きる。』など多数。

また、日本に限らず、貧富の差があっても同じカフェで同じ服装で同じようにケータイをいじれるという「過剰包摂」が進み、弱者が連帯しにくくなった。それだけでなく、互いに弱者だと見られたくないというマウンティングのつばせり合いさえ生じている。豊かな感情を育んだ生活世界は生産性が低い領域とされ、今後市場化される。流れを止めるのは難しい。だからこそ大人が目前の子どもに接する姿勢を改める。たとえ親の経験値が低くても、多様な大人に接する機会を増やし、様々な映画や音楽に接する場を与え、自分の日常とは違う世界があるという想像力を培う。周囲の子らに「人生の選択肢は一つじゃない、横道にそれても別の生き方がある。面白くて幸せな人生はたくさんある」とメッセージを伝えてほしい。(構成・大内悟史)

# 夫ッパリ



嬉しいこと、感動した気持ちは、  
どんどんまわりの人に伝える。

CHECK!



見た映画がよかった、聴いたCDがよかった、読んだマンガが面白かった、カットしても  
らった美容院がよかった、食べたラーメンがおいしかった、かかった整骨院がよかった、と  
なると必ず「教えてあげたい!」と思う人の顔が、頭に浮かんだりタイプです。いわゆる  
おせっかい。

最近感動したこと  
いつも行くスーパーで

でもそれだけじゃないんです。  
感動している時ってコトバじゃなくて、自  
分から波動がもうガンガン出ている、その波  
動に共鳴する人に話すと「よかった!」とど  
んどん感動が伝わります。そうすると感動の  
渦は、自分の中でもどんどん大きくなる。何  
かに感動している時って心がやわらかくなっ  
てて、いろんな物の見方ができるようになっ  
ているんですよ。

もちろん教えた人、全員が感動するわけじ  
やないです。それはそれでいい。  
それよりも、どんどん教えちゃいましょう。  
時間とともに悲しいかな、感動は現実の中で  
どんどん薄れていってしまうから。

感動は伝染する。



タマゴ"自分でも買ってるんだけど"

## 「言いたい劇場」 小菅りや子



上大岡トメ 幻冬舎